雨がやんだら

『シークがきた』改題

椎名誠

新潮文庫

雨がやんだら

新潮文庫　し-25-3

昭和六十二年十一月二十五日　発行
平成　元　年三月十五日　九　刷

著者　椎名誠
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替　東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Makoto Shiina 1983　Printed in Japan

ISBN4-10-144803-5 C0193

新潮文庫

雨がやんだら

椎名誠著

新潮社版

3938

目次

いそしぎ……七
うふ。うふうふ。……四一
巣走屋本店……五一
雨がやんだら……八一
生還……一〇九
歩く人……一三九
シークがきた……一六三
急行のりと3号……二〇九
栽培講座……二四一
解説　北上次郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

雨がやんだら

いそしぎ

六波羅町内会の副会長をしている福島老人がお祝いのサイタロそばを持ってやってきた。サイタロそばというのは赤と緑と紫と黄と白の五色に染められた祝儀用のそばで、たいていは素焼きの大きな丼にふたつたっぷりと盛り、朱塗りの長手盆にのせてもってくるという。

「いやあどうも、このたびは本当におめでとうございます」

と、福島老人は玄関の前で両手を大きく拡げ、斜め前方に差しだす、というきちんとした祝儀用の挨拶をしながら言った。

おれも家の中で両手をひろげ、そのまま斜め前方に差しだすという、なんだか新劇の修羅場のような恰好をしながら老人の正確な挨拶に返礼した。

老人のうしろでサイタロそばを持っているのは水道屋の親父のようだった。玄関先の薄暗いあかりの下で水道屋はちょっと首をすくめるようにして、ひょいひょいとサイタロそばを両手で差しあげながら入ってきた。

「へい、おせわさんでございます。こちらのほうは略式でやらせてもらいます。へい、お世話さんでございます」

と、水道屋はいやにカン高い声で言った。いつも店先でスパナをふり回している時は、もっと渋味のきいた低い声なのに、今日はどうもすこしばかり緊張しているようであった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

水道屋の差しだした長手盆の上のふたつの大きな丼にはサイタロそばがたっぷり入っていた。話には聞いていたけれど実物を見るのははじめてだった。

なるほど、赤と緑と紫と黄と白とそれぞれあざやかな原色に染められたそばが大きな素焼きの丼の中でびっしりとからみあっている。

「へい、お世話さんでございます。合わせておめでとうさんでございます」

と、水道屋が長手盆のむこう側でさっきよりもまたさらにカン高い声で言った。

おれがその盆を受けとるのを待っていたのである。めったに見ることのできないサイタロそばについつい見入ってしまっていて、おれは水道屋の盆を受けとるのを忘れていたのだ。

「ありがとうございます。ごくろうさまでございます」

おれはサイタロそばを受けとり、いったん額の上におしいただいて、それからゆっくり頭をさげた。

「さ、これでとりあえず先祝いの儀はおわりですよ。しかしまあ本当によかったですねえ」

福島老人は玄関先からちょっと奥をのぞきこむようにして言った。

妻の姿をさがしているのにちがいなかった。妻はいま子供たちと風呂に入っている。妻の実家からおばあちゃんがやってきていろいろとこまかい仕度を手伝ってもらっているところなのだ。

「でもなんですよ、うちのばあさんが言ってるんだけどね、本当に羨ましい羨ましいとね、

今朝も言ってましたけどね」
福島老人が言った。
「うちのかかあもね、美人というのは本当にいいもんだ、なんてね、そう言ってましたよ」
水道屋が言った。
「もっともいくらうちのばあさんが羨ましいと言ったところでね、あんなウメボシババアなんかはカブト虫にもなれないからね」
「うおほほほ」
水道屋が笑った。
「夕方から〝火の輪めぐりの儀〟というのがあってね、これはまあこの町ではまだ誰もやったことがないので飛平町から指導員が二人ばかりきてその人たちに様子をみてもらうということになってるんだけど……」
「着ていくものは何ですか？」
火の輪めぐりの儀なんていうのははじめてきく。もっとも今度のことが決まってからというもの、何をやるにしてもやらされるにしてもみんなはじめてのものばかりだったけれど、それでも〝お召し送り〟の話は子供のじぶんからいろいろ聞いていたし、そのために行なわれる重要な儀式のひととおりのありさまというのはだいたいわかっているつもりだった。とにかく儀式というからには何にしても恥ずかしくないようにきちんとつとめなくてはならな

いだろう。
「しきたりもいろいろ変るよね」
と、水道屋が言った。
「昔はもっと面倒だった。昔といってもこの前は十年ぐらい前だったからねえ。あれはたしか配膳屋の娘でやっぱり色の白いうりざね顔の美人だったですよ」
「そうそう、この町で三人目の〝お召し送り〟でね。祝いの宴は夜中だったんだけれど町中の者がみんな出てきてねえ、猿辺川のそばの瞑想祈念堂の前で朝がたまで続いたですよ」
「あの配膳屋の娘はたしかカエデさんとかいったっけねえ」
「そうそうそれでまあ配膳屋の親父がすっかり後祝いの時に酔っちまって大変だった……」
水道屋が自分の話にせわしなく何度もうなずきながら言った。
福島老人もうなずく。
「無理もないよ。儀式もいろいろこみいっていたしねえ」
「しきたりもいろいろ変ることだし」
水道屋がさっきと同じことをまた言った。
風呂からあがったのか家の奥で子供たちがキャアキャアいって走り回っている声が聞こえる。
「ま、それじゃわたしらはひとまずこれで……」

福島老人がもう一度奥の方をのぞきこむようにして言った。
「どうせ夜にまた会うわけですがね」
水道屋が言った。
「こいつはお宅の祭壇の前においといて下さい」
福島老人はおれが両手にかかえているサイタロそばを見ながら言った。
「たべるのは〝お送り〟のあとです」
走り回っていた子供のうちの四歳になる娘の方が玄関まで飛びでてきておれたちを眺め「きゃははは」と頭からストンととびぬけたような声で笑った。六歳になる上の娘と妻と三人でゆっくり風呂に入り、みんなでいろいろ楽しい話をしたのだろう。
「ちゃんと体をふきなさい！」
おれは四歳の娘に大きな声で言った。
「だめよ、サッちゃんは裸でだめですよ」
おばあちゃんが娘を呼んでいる。
「それじゃ、いろいろまだこのあと大変でしょうけれど、とりあえずわたしらはこのへんで……」
福島老人はようやく妻を見ていくのをあきらめたようであった。
「あ、そうそう、夕方までに『局』の係官が書類をもってくる筈です。印鑑を用意しといて

ください」
「ではまた」
水道屋がいやに丁寧におじぎをした。
「ありがとうございました」
おれもつられて深々と頭を下げた。
居間に戻ると、妻が浴衣をきて台所の椅子にすわっていた。
「おさきに……」
すっかりほてった顔で妻が言った。おばあちゃんは娘たちに下着をつけさせている。
「町内会の人がきてね、ちょっと話をしてた」
「いろいろ大変ね」
すまなそうに妻が言った。
「大変というわけでもないけどさ。でも疲れるよな、こういうことは……」
「あたしも昼間は〝衣裳あわせ〟というのでさんざん念珠会館の中をひっぱり回されて疲れちゃったわ。あたしあの会館の中にはじめて入ったけれど、おどろいたのはあの中に大きな黒い牛がいるのよ。もちろん生きてるのよね。念珠会館の端っこの方にじっと立っていたわ。牛っていうのは悲しそうな眼をしているでしょ。あんな中で気の毒にね」
玄関のチャイムが鳴った。

出ていくと「局」の係官だった。モスグリーンの制服を着て一人は長身に眼鏡、もうひとりは太ってあまり似合っているとは思えない薄い口髭をはやしている男だった。

「『局』のものです」

と、口髭が言った。そちらの方が上司らしい。

「このたびはまことにおめでとうございます」

口髭のうしろから割り込むようにして玄関のたたきに入ってきた長身の方が、紅白の布でくるんだ小さな箱を出し、それから簡単なおじぎをした。

「おめでとうございます」

と口髭も言った。

おれは黙って頭をさげ、紅白の箱を見つめた。

「褒賞金の分割請求証書が入っています。分割は百七十二回にわけられています。原則として等分割で三十年未満となっていますが、短期に十回程度で引きだされてもかまいません。ただしその場合、手続きは一週間前に事前申請を行なった上、『局』の方へ直接ご本人にきていただき、居住証と夫婦証明と町会の承諾書二通が必要です。くわしいことはこの中の説明書に明記してあります」

長身の男は早口でそれだけのことをよどみなくしゃべった。

口髭も長身の男もはてしなく無表情であった。しかしおれはすっかり緊張していてそいつ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com